

若者の「家出」言説の変容

——商業雑誌における「家出」記事の分析を中心に——

京都大学 中森弘樹

1 目的

近年、高齢者や独居者の孤立に注目が集まり、「無縁社会」や「絆」といった言葉が流行語となるなど、家族をはじめとした親密な関係から個人が受動的に排除される事態を問題視する言説をマスメディア上で頻繁に見ることができる。その一方で、個人が家族から能動的に離脱する事態に着目する言説は、相対的に減少したように思われる。その典型的な事例の一つが、若者の「家出」に関する言説であろう。若者の「家出」を社会問題として取り上げる言説は、後述するように戦前から高度経済成長期ごろまでマスメディア上で頻繁に取り上げられるが、1980年代頃から次第に姿を消してゆく。また、社会学においても「家出」は1960年代から70年代にかけて社会病理学の研究対象の一つとなっていたが、1990年代以降は「家出」そのものを主題として扱う研究はほとんど見られなくなる。その一方で、警察庁の「行方不明者の概要」資料によれば、直近10年間の「家出」の届出の件数はやや減少傾向にあるものの、現在でも毎年8万件以上の届出が出されている。それにもかかわらず、なぜ「家出」を問題視する言説はマスメディアであまり取り上げられなくなったのか。この点について考察することで、そこから家族や人間関係に対する問題の立て方の変化を読み取ることが可能であると見込まれる。上記の考察の一端として、本報告では特に若者の「家出」言説の起源に着目し、そこから現在に至るまでの変遷を見てゆくことにする。

2 方法

上記の目的に基づき、本報告では「家出」に関する商業雑誌記事の分析を行う。分析の対象とするのは、『婦人公論』と『週刊朝日』と『週刊新潮』の三種類の雑誌とした。『婦人公論』には「家出」が初めて問題となった1900年代前半に「家出」の記事が多く掲載されており、また『週刊朝日』と『週刊新潮』には1950年代以降の「家出」の記事が多く掲載されている。上記の雑誌から、記事のタイトルに「家出」という言葉が用いられており、かつ若者の「家出」を社会問題として扱う記事を収集した。分析にあたっては、記事で語られている若者の「家出」の理由と目的に着目しつつ、「家出」がどのような社会的背景に基づく問題として位置付けられているのかを確認した。

3 結果・結論

雑誌記事の分析を行った結果、まず「家出」が最初に社会問題として取り上げられるようになったのは1910年代から1930年代にかけての時期であり、特に『婦人公論』で裕福な「令嬢」が自由を求めて「家出」をするという事態が盛んに語られた。その後、1950年代に「家出」を主題とした雑誌記事の数はピークを迎え、貧しい田舎から都会の自由な生活を求めて上京した「家出娘」の挫折が共通のストーリーとして語られる。1970年代になると、特に理由や目的のない「家出」の増加が指摘され始め、少年少女の「非行」の一環として扱われる傾向が強くなる。1990年代以降は、2000年頃に「プチ家出」という言葉が流行し、家に帰らずに異性の家やネットカフェを渡り歩く少女の生活が取り上げられることが多くなるが、家出人が「家族から離脱する」こと自体に関心が向けられることは少なくなる。そのために「家出」という概念も、「援交少女」や「ネットカフェ難民」など、家出人の「家出」後の実態をより細かく規定する言葉へと置き換えられていった。

以上の経緯より、当初は家族からの自由や逃避を目的として語られた「家出」の言説であるが、次第に「家族から離脱する」という行為自体やその目的が意味をなさなくなり、そのために「家出」の概念は記事の主題から退いていったことが明らかになった。